

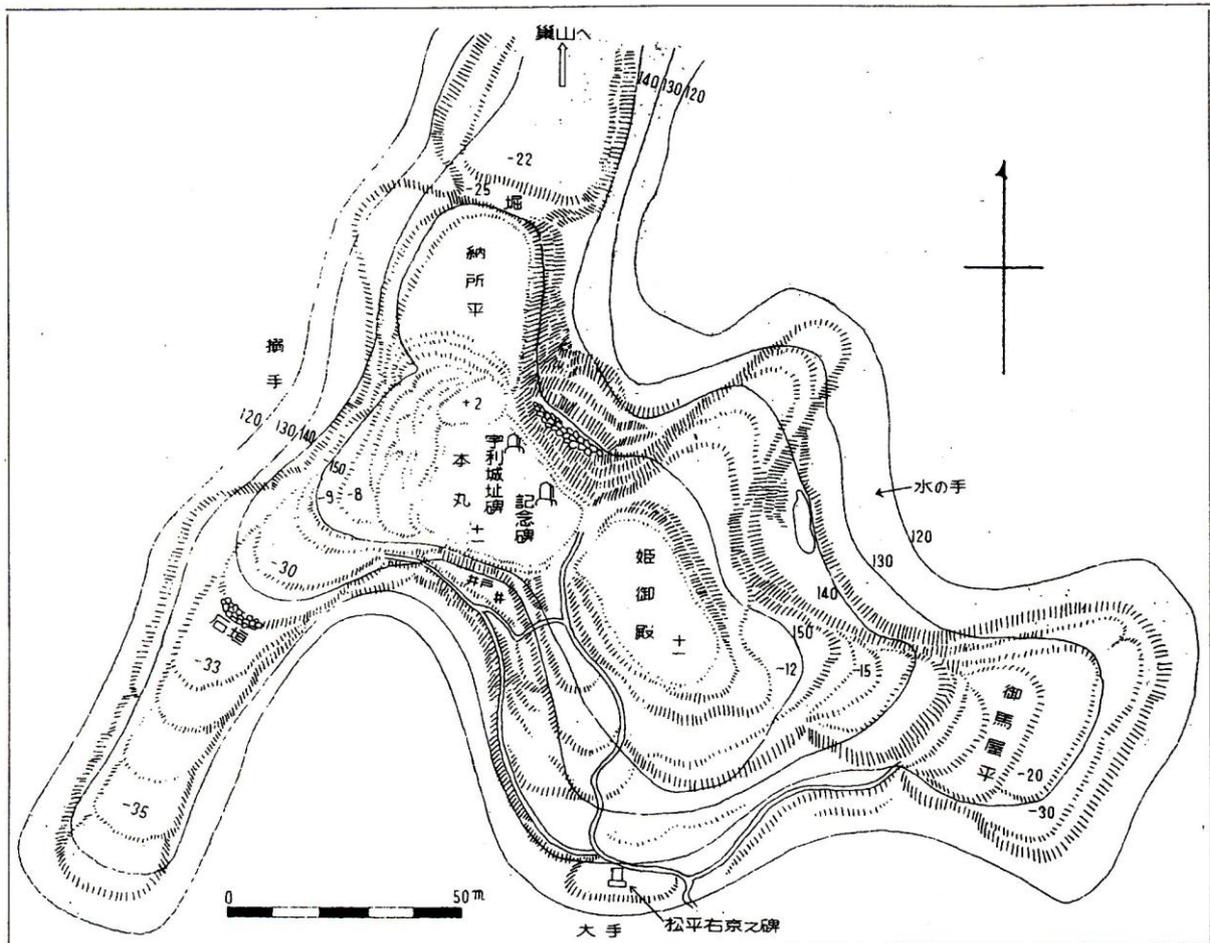
# 宇利城址

築城年代は明らかではありませんが、宇利城址は、典型的な山城の形態をしていて、戦いの様子もはっきり記録に残っているため、学術的価値が高く、県指定史跡の第1号として認定されました。今でも、本丸周囲の土塁や石垣などを見ることができます。

**本丸** 標高160m、周囲に土塁を巡らし、東西40m、南北36mの平坦地で「宇利城址」「熊谷備中守實長碑」の碑がある。北端に物見櫓と思われる高さ1.5m、幅20mの土壇がある。本丸の北は10mほどの急崖となっていて、空壕を隔てて納戸平なんどたいらに続いている。納戸平は、東西25m、南北20mで北に約6mの空壕からぼりがあつて裏山に続いている。

**二の丸** 本丸の南東で長さ37m、幅19mの平坦地で「姫御殿跡」と呼ばれている。この姫御殿こしぐるわの南東に6段の腰廓おんまだいらがあつて、その先に「御馬平」と呼ばれる曲輪がある。

**井戸曲輪ぐるわ** 宇利城には三つの水の手があつて、その一つ本丸の南下に深さ3mぐらいの井戸がある。戦いに敗れ、この城を落ちのびるとき、宝物の金の茶釜をこの井戸に沈めたという。



## 宇利の戦い

西三河を平定した松平清康（家康の祖父）は、今川氏の勢力が衰えたのを機会に、享禄2年（1529年）11月4日に、3000人の兵を率いて安城を出発しました。

今橋城（吉田城）、田原城を落とした清康は、奥三河の奥平（作手）、菅沼（野田）、西郷（八名郡）、菅沼（田峰）の各武将を従えましたが、一人宇利城の城主の熊谷備中守実長は、駿河の今川氏輝との盟約を守り、従おうとしませんでした。清康の軍勢は、宇利の郷に入ると、まず民家に火をつけて氣勢を上げ、八幡平に本陣を置いて軍議を重ね、兵を正面と背面の二手に分けて宇利城に迫りました。このとき、清康は富賀寺の裏山にある四十九院について指揮をしたとされます。作手の奥平貞勝や野田の菅沼定則も松平勢の先鋒として加わりました。城の正面からは、清康の叔父にあたる松平右京之進が2000人の兵で攻め、旗本勢は南の八幡神社の森と、西の富賀寺の山の上に陣を構えました。前面及び側面が沼田で、裏手を山で囲まれた登りの険しい天然の要害の山城は、寄せ手の軍勢にとって相当苦しい戦いでした。

城の大將熊谷実長は、世に聞こえた剛の者です。大手門の木戸を開いて打って出ました。右京之進の前面です。松平勢は、助けようとはしますが、回りに沼田があり、近寄れません。右京之進たちは退かずに勇ましく戦いましたが、とうとう右京之進の一隊は討ち死にしてしまいました。

これを見ていた清康は、「右京之進がやられては面目が立たない。」と一斉に攻め立てました。熊谷勢は死力を尽くして防戦しますが、過半数を失って次第に旗色が悪くなっていきます。残った者は城をみて場内に逃げ込み、城の中から大石や大木を落とし、松平勢がひるんだところへ矢を飛ば



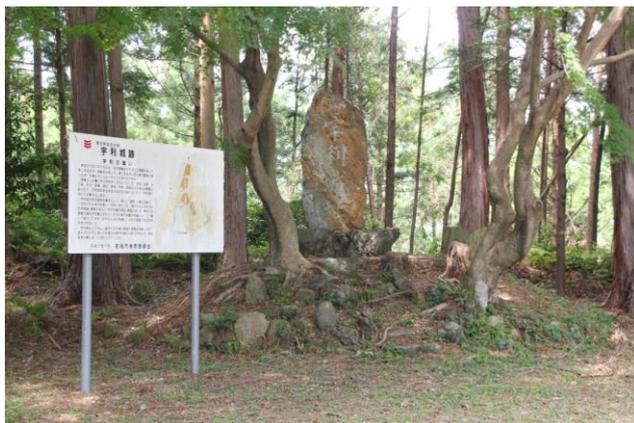
宇利川付近から見た宇利城址遠景



松平右京之進討ち死とされる場所に建てられた墓

してきます。そのため、これ以上攻めることができなくなりました。

この時、松平勢の陣の小高い丘の上で、野田城主菅沼定則が狼煙さだのり のろしを上げました。すると、これに応えるように城の中から火の手が上がりました。城の中にいた岩瀬庄左衛門は、もと松平家に仕えていたことがあり、定則や清康との間にいざという時には松平の味方



本丸跡に建てられた宇利城址の碑

になるという約束がしてあったのです。城中に上がった火の手は山風にあおられて、みるみる燃え広がってしまいました。こうなってはどうすることもできません。城主の熊谷実長は、残った城兵と共に山伝いに落ち延びたとも、討たれたともいわれています。戦いの後、菅沼定則は戦功を認められ、宇利と山吉田とがしまの地を授けられました。

戦い後の熊谷一族の逃亡先は、長男の直安が豊根の兔鹿嶋、次男の正直は幸田町こうりきの高力へ落ちのびました。豊根の熊谷は土着して一代百姓となり、高力の熊谷は正直の子、重長が高力を名乗り、松平家に仕えました。重長の孫の清長は、三河三奉行に数えられるほどで、「仏の高力」と呼ばれたことで知られています。また、長男直安の子の直次は、今川氏を頼って遠江（浜松市入野）に移ったと伝えられています。備中守実長自身は、討たれたとも伝えられていますが、はっきりしていません。

松平清康は、戦いでは勝ったものの、その後、尾張守山で家臣に裏切られて殺されてしまいます。わずか25歳の若さでした。

なお、慈廣寺じこうじは熊谷氏の菩提寺で、重実、実長の位牌二基が安置されています。

(文責 安形茂樹 参考：新城市誌、新城文化財案内)

### 実長は熊谷直実の末裔

宇利城は、源平合戦における一ノ谷の戦い（1184年）で、平敦盛あつもりを討ったことで有名な熊谷次郎直実なおざねの末裔、重実が築いたといわれています。実長は重実の子とされています。

敦盛の最期は平家物語で名場面として詠われ、後に能や幸若舞こうわかまい、歌舞伎などの題材となりました。織田信長が好んだ幸若舞の「人生50年下天の内をくらぶれば、夢まぼろしのごとくなり」は、敦盛の一節です。

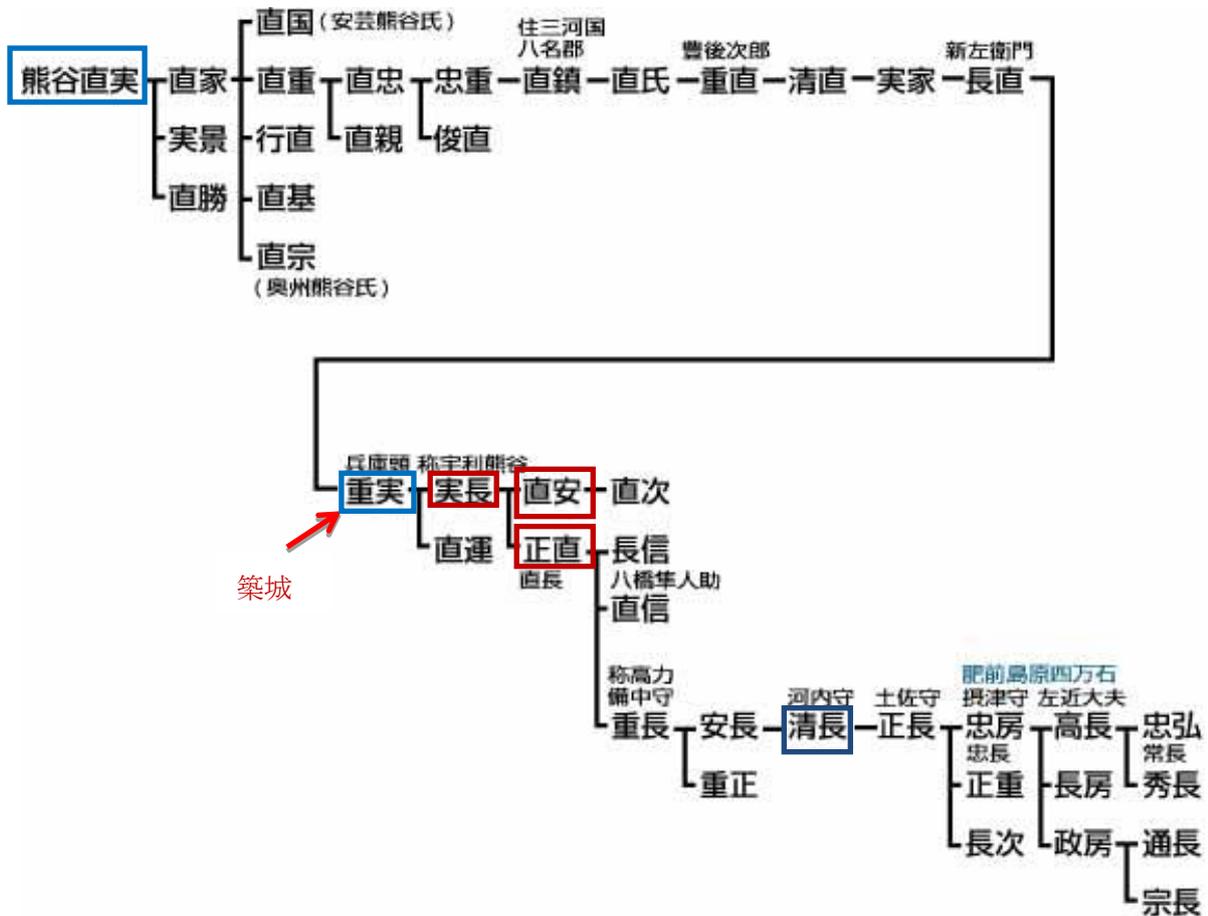
戦いにかかわった人たち

<城方> 熊谷氏一族

- ・熊谷備中守実長 さねなが 落ちのびたか、討たれたか、自刃したか不明（高齢？）
- ・熊谷直安 なおやす 豊根熊谷氏
- ・熊谷正直 額田で高力氏を名乗り、後に家康に仕える。清長は名奉行として知られる。（仏高力）

なおつね  
直鎮のとき軍功があり足利尊氏から三河国八名郡を与えられ、武蔵国熊谷郷から移り住み、宇利熊谷といわれたのが始まりとされる。

熊谷氏系図



戦いにかかわった人たち

<松平方>

- きよやす  
 ・松平清康 1511 年生まれ 当時 18 歳  
 通称 次郎三郎  
 自称 清和源氏世良田氏
- うきょうのすけちかもり  
 ・松平右京亮親盛 (叔父：安城、福釜城主 当時 28 歳)
- ないぜんのかみのぶさだ  
 ・松平内膳正信定 (叔父：親盛の弟、桜井城主 当時 20 代)
- さだのり  
 ・菅沼新八郎定則 (野田城主) 当時 30 代? 二陣で功あり 狼煙あげる。
- さだかつ  
 ・奥平貞勝 (作手亀山城主) 当時 17 歳 搦め手門から攻め入る。
- ・岩瀬庄左衛門 (もと松平家臣、内応して城に火を放つ)



松平清康像

松平一族系図

新行紀一氏の作製したものに拠る。

